

## セント・ジョージ校のこと

以上、BC州の公立学校の教育であるが、バンクーバー近辺にも私立学校が、三十から四十あるようだ。その中で厳しく、優れた男子校があるので、校長先生を訪ねてみた。この学校は四十年の歴史があり、名をセント・ジョージ・スクールと言う。教員四十五名、生徒数は、小学・高等学校を合わせて六百三十名でリキエラムは大体BC政府文部省のに従うが、内容は公立より深く、豊富である。また、芸術、スポーツに力を入れている。知性の発達、算数、国語の勉強ばかりに依るのではなく、絵をかくことによっても育まれるのであって、スポーツ、芸術を通して、創造力が大いに刺激されるという考え方からである。高校生のスポ



1ツの場合などは、週に二日の放課後の練習と土曜日に行われる試合に参加しなければならぬ。この高校を出た者は、ほとんどと大学に進むとのことである。この学校には入学試験があり、成績優秀でなければならぬのはもちろんであるが、かなり高額な学費を払わなければならない。年間の学費は次のようになっている。

二年一千五百三十ドル  
三年、四年一千八百六十ドル  
五年、六年、七年一千四十九ドル  
八年、九年一千九百九十九ドル  
十年、十一年、十二年二千六百ドル

## 息子の学校

それでは、子供たちがどのような学校生活を送っているか、筆者の息子の経験を通じてみてみよう。

BC州では、幼稚園が小学校についている。ここでは、絵をかいたり、工作したり、歌をうったりしながら、集団生活に慣れるようにし、学校の決まりや、挨拶の仕方を少しずつ教わる。クラスは午前中または午後だけで、ほとんど勉強らしいことはしない。

さて、一年生になると、一日中、学校に行くことになり、大きくなったような印象を子供たちに与える。子供たちは早く学校に行きたがる。クラスの始まる前の何十分間か、外で遊びたいのだ。クラスが始まるまで教室に入れないので、お弁当を持って来る子供は、弁当を外に置きっぱなしにしておく。紙袋などに入れておくと、犬にさらわれてしまうこともある。ベルが鳴ると子供達はいっせいに教室

に入っていく。クラスは二年生と一年生が一緒。一年に一度とる記念写真で、みんな、口を開けて笑っている。前歯が抜けているのが一年生、大きい歯が生えているのが二年生だ。



勉強する時は、一年と二年に分かれ、しかもそれぞれ能力別に二つのグループに分かれる。学校が始まって暫くの間、親はそんな事情は知らなかった。教科書もノートも学校に置きっぱなしで、何を勉強しているのか、親は先生を訪ねて聞かなければ分からない。ある日、お昼に帰った息子が、「きょうは、午後はクラスがないって、先生が言ってたよ」と、学校に戻ろうとしない。聞き間違えかも知れないからと、学校へ行かせながらも、なせ、そんなことを言ったのか不思議に思った。たまたま先生に会って話した時、アルファベットも満足に知らない息子を、出来る方のグループに入れていたことが分かった。息子は出来る友達に追いつく学校をさぼりたくなりたい。少し無茶かと思ったが、そのまま続けさせた。一年の終わりに、みんなに迫いつき、簡単な文は書いたり読んだりできるようになった。「さすが先生は先見の明あり」と、親バカの都合の良いように納得した

ものだ。

## 掛け算は十二の段まで

二年生になった。担任の先生は変わらなかった。一学期は十一月の末で終わり、成績表をもらって、先生と個人面接がある。成績は大して良くないのに、個人面接ではほめられた。「宿題はないですか」と、日本の母親らしいことを伺うと、「朝の九時から三時まで学校で勉強しているのだから、それ以上することはしないでしよう」と言われてしまった。さすが、カナダでは、宿題や塾での勉強など考えなくていいのだ。

十二月になると、日本の学芸会のようなもので、クリスマスコンサートの練習するだけで、大したものではないが、コンサートの日には親も見てくる。スナックや飲み物を囲んで、和気あいあいとしている。これでクリスマスの休暇に入る。と言っても二週間ほどで、一月の三日頃から学校が始まる。

一月のはじめに、ご存じのように、バレンタインデーというのがあり、子供達は親愛の情を表わすために、お友達に可愛いカードを送る。カードを買いそこねた息子は、二十五個のカードを折り紙で折って済ませた。先生あてのものには立派なハートの印を書いた。意外にこんなのが変わっていて好評だったりする。三月に二学期目の成績をもらい、一週間の復活祭すなわち春休みとなる。